

早稲田大学 教育学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(現代文2問、古文1問、漢文1問)
難易度	昨年並み

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「リベラリズムと権力」について。

出典:稲葉振一郎『政治の理論』。

《本文字数:約 3600 字＝昨年より約 200 字減少。設問数:7＝昨年より2問増加。》

小問	難易度	コメント
問一	標準	【傍線部説明】「文章のテーマ」とあるので、最後まで読んでから判断する。ニは「政治の経済への介入」が不適切である。
問二	標準	【傍線部理解】傍線部3の次段落から、傍線部2・3の「自由」が、それぞれ「実体概念」と「関係概念」であるとわかる。
問三	やや難	【理由説明】「当事者の主観においては」の解釈が問われている。ホは傍線部5を含む一文の内容から正しいと判断できる。イは「客観的」が36～37行から、ここにはあてはまらないとわかる。
問四	標準	【傍線部理解】傍線部6を含む段落の第三文にある。
問五	やや易	【傍線部理解】直後の2文から容易に判断できるだろう。
問六	やや難	【傍線部理解】直後の二つの段落内容から判断する。ホは「消極的な情報」が不適。
問七	やや難	【傍線部説明】ハの「外部の力の影響を受けにくい」とは、傍線部8の直前の「大衆社会～における孤立者の自由」を指している。イは「環境に～持つ」が、ロは「社会の力と対立する」が、ニは「社会の中での自由」が、ホは「全知の脳科学者～」以下が、それぞれ不適切。

(二) 評論文。「天心とチェンバレンの茶道観」について。

出典:田中仙堂『岡倉天心「茶の本」をよむ』。

《本文字数:約 4300 字＝昨年より約 900 字増加。設問数:6＝昨年より3問減少。》

小問	難易度	コメント
問八	標準	【漢字書き取り】いずれも漢字力というより語彙力が試されている。
問九	標準	【傍線部理解】文章全体の内容から判断する。消去法が有効だろう。
問十	標準	【傍線部理解】引用文直後の二つの段落内容から判断する。イは「平安時代～」が限定しすぎていて不可。
問十一	やや易	【脱落文挿入】脱落文は近代西洋の「ヨーロッパ中心主義」を説明している。直前に「細かい点」が書かれている場所に入る。
問十二	標準	【理由説明】引用文自体、及び、前段落の内容から判断できる。消去法も有効だろう。ニは「華美の～代表するもの」が不適切。
問十三	標準	【趣旨理解】傍線部3の前段落の内容、及び、「漢字一字」という設問条件から、探し出すのは難しくないだろう。

(三) 古文。出典：『増鏡』。

《本文字数：約 1600 字＝昨年より約 500 字増加。設問数：9＝昨年より 2 問減少。》

小問	難易度	コメント
問十四	やや難	【主語判定】2・3が難しい。2は都から離れることが前提の人物の動作。2が確定すれば3も分かる。
問十五	易	【掛詞】「いたづらに果つ」と「初霜」の意。基本である。
問十六	標準	【文脈把握】35行目で具行が死罪になったことから確定できる。
問十七	やや難	【傍線部理解】2行前「隠岐の御送り」から、佐々木が、後醍醐帝とその一行の話をしていると見抜く。直後の「かくも…」とのつながりからイにしぼれる。
問十八	標準	【傍線部理解】人にとってどうあっても逃れることのできないこととは何か。
問十九	易	【空欄補充】まじ+めり=まじかるめり・まじかんめり・まじかめり。基本中の基本。
問二十	やや難	【空欄補充】和歌であることを意識すれば、空欄には3音の語が入ると推測できる。波線部の「にくき口つき」がヒント。鎌倉幕府の末路が知りたいときつい口ぶりで詠んだということ。
問二十一	やや易	【傍線部理解】「人わろし」で「体裁が悪い」の意。重要古語である。
問二十二	易	【文学史】『太平記』は後醍醐帝の討幕計画以後の南北朝内乱を描く軍記物語。

(四) 漢文。出典：曾敏行『独醒雑誌』。

《本文字数：179 字＝昨年より 37 字増加。設問数：6＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問二十三	やや易	【傍線部理解】傍線部および直後の「謾懸於壁」とのつながりから判断する。
問二十四	標準	【漢字の読み】「屢」で「しばしば」と読む。
問二十五	やや易	【傍線部理解】傍線部の「然」の指示内容をおさえる。
問二十六	やや易	【空欄補充】猫は描かれた鼠を本物のように感じたということ。
問二十七	標準	【傍線部理解】本文末4行の内容から判断する。ニの「こと寄せて」がその内容を的確にあらわしている。
問二十八	標準	【内容合致】ハが本文に明らかに書かれていない。紛らわしい選択肢はない。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体の難易度は昨年並み。大問一の出来で差がつくだろう。

大問一は、「リベラリズムと権力」についての評論文。昨年より難化した。抽象度の高い文章で難しい。ただし、「リベラリズム」「決定論」といった頻出論点からの出題なので、論点の学習をしっかりとってきた受験生にとっては手ごたえがあったはずだ。ここで高得点をとれば大きなアドバンテージになる。

大問二は、「天心とチェンバレンの茶道観」についての評論文。昨年より易化した。基本・標準レベルの設問ばかりなので高得点を狙いたい。

大問三は、『増鏡』。昨年よりやや易化した。本文は昨年より約 500 字増加した約 1600 字の長文だが、そのぶん設問が2問減少した。口語訳を書かせる記述問題は4年連続で出題されなかった。本学部の古文では、正確かつ速く読む力が求められている。

大問四は、『独醒雑誌』。難易度は昨年並み。基本・標準レベルの設問ばかりなので漢文の学習を地道に続けてきた受験生は高得点がとれただろう。